

大原野神社

大原野神社は、奈良の有名な春日大社との歴史的な繋がりから「京春日」とも呼ばれています。春日神社のご祭神は春日大明神で、伝統的に白鹿に乗った姿で描かれています。大原野神社の境内は桜や菖蒲、睡蓮、モミジの名所として人気があり、鹿をモチーフにした彫像やお守り、絵馬（神社やお寺に奉納する絵が描かれた木の板）などで知られています。参道沿いと、鳥居の外の駐車場近くにある2軒の茶屋では、伝統的なよもぎ餅を売っており、参拝後の軽食として、または持ち帰りで楽しむことができます。

歴史

全国にはたくさんの春日神社がありますが、その中でも大原野神社は総本社である春日大社から春日大明神の分霊を移した最初の神社と考えられています。784年、日本の都は平城京（現在の奈良）から長岡京に移りました。その際、貴族である藤原氏の守護神である春日大明神を祀る神社として、新しい中央政府に近い場所に大原野神社が建てられました。藤原氏一族は、何世紀にも渡って朝廷で強い影響力を持ち、多くの男性は高位に属し、多くの女性は皇后になりました。春日大社と同様に、大原野神社は国家の平和と繁栄を祈願する役割を担いました。794年に都は平安京（現在の京都）に再び移りましたが、その後も大原野神社はその役目は変わりませんでした。

春日大明神と藤原氏

春日大明神とは、雷の神・建御賀豆智命（たけみかづちのみこと）、軍神・伊波比主命（いわいぬしのみこと）、藤原氏の祖神・天之子八根命（あめのこやねのみこと）とその妻の比売大神（ひめおおかみ）という四柱の神様を表します。天之子八根命（あめのこやねのみこと）の息子、天押雲根命（あめのおしくもねのみこと）と一緒に祀られることも多いです。これらの神はいずれも日本の建国に重要な役割を果たしたとされています。この神々は政治や守護、知恵、女性の良縁に対してご利益があると言われてしています。

大原野神社は歴史を通じて、藤原氏の支援と皇室の庇護を受けてきました。藤原氏の当主を母方の祖父に持つ文徳天皇（827年～858年）は、850年に壮麗な社殿を造営しました。藤原氏では娘が生まれると、皇后に選ばれることを願って大原野神社に祈願し、願いが叶うと、神々に感謝を伝えるため、立派な行列を伴い参拝することが伝統になりました。この行列については、藤原家

の分家の女官であった紫式部（973年?～1014年?）が書いた『源氏物語』など、歴史的な記録や詩、小説にも登場しています。著名な歌人、在原業平（825年～880年）は、藤原家の女性の参拝に同行したとき、次のような歌を詠みました。

（歌の翻訳文）

小塩の山のふもとにある大原野神社の神々
我々の今日の大行列を見て
きっと神々の時代のことを思い出すことでしょう

（歌の原文）

大原や
小塩の山も
けふこそは
神代のことも
おもひいづらめ

境内

鳥居をくぐって神社の境内へと続く参道脇には、鯉沢池と池の上にかげられた風情のある朱色の橋があり、池の対岸には天押雲根命を祀る若宮神社があります。近くにある柵で囲まれたただれ桜は、枝に丸い大きな花房がたくさん咲くことから「千眼桜」（千の目がある桜）と呼ばれています。また、見頃の期間が3日間しかないことから「幻の桜」とも呼ばれており、満開の千眼桜を見た人は、千の願いが叶うと言われています。

参道のさらに先には、銅製の鹿の口から水が流れ出る手水舎があり、参拝前にここで手と口を清めます。そして左側には相撲場があり、9月の御田刈祭で行われる大人も子どもも参加する神事「神相撲」で使用されます。この祭は豊作を神に感謝するために開催され、1717年以来途切れることなく続いています。

本殿

参道にある三番目の鳥居の先には、1822年に建てられた本殿があります。本殿は春日造り（切妻造り・妻入りで、正面に階隠はしかくしをつけ、棟には置き千木・鯉木を置く）の様式で建てられており、中央には奉納と祈祷のための台があり、そしてその両側には二棟ずつ、合計四棟の社殿が設けられています。この社殿には春日大明神がそれぞれ一柱ずつ祀られています。本殿の背後には背の高いヒノキの木が見え、白色と朱色の伝統的な社殿と自然なコントラストをなしています。左側にいくつかの末社があり、病気平癒や厄除け、五穀豊穰、商売繁盛、健康、長寿、子授けの神様が祀られています。

神の使いは鹿

春日大明神は、藤原氏の祖先の元に白鹿に乗った姿で現れたという伝説があり、鹿が神の使いとされるようになりました。そのため、大原野神社では、一般的に見られる神話上の獣である狛犬ではなく、雄鹿と雌鹿の石像が本殿を守っています。お守りや御朱印帳（神社やお寺に訪れた後のその印で捺印を受ける帳）、絵馬、おみくじも鹿をモチーフとしたものとなっています。